

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：35305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06418

研究課題名(和文) 第二言語としての日本語における空項の習得

研究課題名(英文) L2 Acquisition of Null Arguments in Japanese

研究代表者

木津 弥佳(田中)(Kizu, Mika)

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：00759037

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、空項の中でも空主語現象に焦点を置き、上級日本語を外国語・第二言語として習得する英語母語話者30名、中国語母語話者30名、韓国語母語話者30名の計90名と、統制群としての日本語母語話者30名を対象に、空主語の認識と生産に関する実験調査を行った。調査の結果、認識に関しては、英語・中国語母語の二つのグループが日本語母語統制群と比べて有意差があったが、生産に関しては、文の種類によって英語・中国語・韓国語母語のそれぞれのグループで統制群との有意差が観察された。これらは、Miyagawa (2017)の一致素性の類型論やBaker (2008)のマイクロパラメータにより説明できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：We conducted experiments for null subjects in L2 Japanese. The experiments consisted of two tasks: one was to identify the referent of the subject, and the other was to judge the acceptability of overt versus null subjects in context. The results for Chinese, English, and Korean advanced learners of L2 Japanese (n=90) were compared to those of Japanese native speakers (n=30). Interestingly, there is a significant difference for the identification task between those in Chinese/English groups and in the control group. However, the results for the acceptability judgment task do not display the expected dichotomy but require more language specific accounts depending on the sentence types. These findings show that their L1 knowledge impinges on the Chinese and English learners' performance, which supports Miyazawa's (2017) typology on feature agreement. The acceptability task results can be explained partly from the viewpoint of the effect of micro-parameters (Baker 2008).

研究分野：言語学

キーワード：空主語 第二言語習得 日本語教育

1. 研究開始当初の背景

英語などの言語とは異なる日本語の特徴の一つとして、適切なコンテキストがあれば、主語や目的語などのいわゆる項 (argument) が省略できるという現象がある。これは radical/discourse *pro-drop* と呼ばれる言語の特徴であり、これまで理論言語学、言語類型論、言語習得の分野で中心的なトピックとして扱われてきた。例えば、生成文法の枠組みにおける第二言語習得 (GenSLA) 研究では、Rothman (2009)、Sorace & Filiaci (2006) などにおいて、ロマンス語系の言語については広く論じられているが、日本語についての研究に関して言えば、Yamada (2009)、Okuma (2012)などに限られ広くは論じられていない。また、外国語としての日本語教育の観点からも、上級学習者であっても適切な省略は困難であるという小柳 (2004) の指摘があるが、教科書での同現象についての体系的な説明はほとんど見当たらないのが現状である。

そこで、Kizu (2013)、Kizu & Yamada (2013a, b) は、空項現象の中でも述語による主語制約のある主文主語 (1人称と2人称) に焦点を置き、外国語・第二言語としての日本語を学ぶ学習者の空主語習得に関する実験調査を行った。その結果、初級学習者は主語制約のある空主語の認識が困難であるが、上級学習者は日本語母語話者と類似した認識を習得していることがわかった。さらに上級学習者は、主語制約のある文の空主語を日本語母語話者よりも過剰に使用する傾向にあることが明らかとなった。

2. 研究の目的

以上の先行研究から、(1) と (2) を本研究の課題とした：

- (1) 主語制約のある空主語の方が制約のない空主語よりも習得困難であるのは、単に主語の人称によるものなのか、あるいは人称に関係なく別の理由 (例えば、インターフェイスに関わるからという理由; Platzack 2001, Sorace & Filiaci 2006) によるものなのか。
- (2) 空主語の過剰生成に関して、母語による影響は考えられるか。また、母語の違いによる習得の差がないとすれば、より一般的な言語 (習得) の原理によるものなのか (例えば、Avoid Pronoun (Chomsky 1981) など)。

(1) については、これまで扱ってこなかった3人称主語で制約のある述語文を実験文に加え、1人称、2人称だけでなく3人称の主語でも述語による主語制約がない文と比較できるようにした。(2) については、*pro-drop* 現象に関して類型論的に日本語と

類似していると考えられる韓国語と中国語、それから *pro-drop* を許さないとしている英語を母語とする上級日本語学習者を研究対象とすることで、上記課題の解明に取り組んだ。

3. 研究の方法

(1) (2) の課題に答えるため、以下の種類の述語を含む文を実験文として使用した。

- I. 主語が一人称に制限される述語：a. 話者の意向 (「～ようと思います」) と話者の b. 内的心理状態を表もの (「頭が痛い」「～たいです」など)
- II. 主語が二人称に制限される述語：a. 禁止 (「～ないでください」) と b. 依頼 (「～てください」)
- III. 主語が三人称に制限される述語：a. 伝聞 (「～そうです」) と b. 願望 (「～たがっています」)
- IV. 主語の人称に述語による制約がなく、文脈に依存しているもの (文脈上、a. 一人称、b. 二人称または c. 三人称になるもの)

I~IV の例文を使用し、空主語の習得に関する2種類の実験を行った。一つは会話文中での空主語が指し示す人称を選択するテスト (タスク1) で、パワーポイントを用い音声聞きながら会話文もスクリーン上に提示して回答を選択させた。実験文の数は I~III がそれぞれ6 (a と b それぞれ3ずつ)、IV は18 (a, b, c それぞれ6ずつ) の合計36文である。

表1：タスク1 実験文の内訳

	数	文の種類 (数)
I	6	意向(3)、内的心理(3)
II	6	禁止(3)、依頼(3)
III	6	伝聞(3)、願望(3)
IV	18	1人称(6)、2人称(6)、3人称(6)

もう一つは、会話文中で主語を省略した場合と省略しなかった場合での文脈における当該文の容認度を-2 から+2 のスケールで判断するテスト (タスク2) である。実験文数は、I、II、III がそれぞれ8 (それぞれ省略主語、非省略主語文が4ずつ)、IV が24 (それぞれ省略主語文と非省略主語文12ずつ) の合計48文とした。

表 2：タスク 2 実験文の内訳

	数	主語省略	述語 (数)
I	8	ありなし	意向(2)、内的心理(2) 意向(2)、内的心理(2)
II	8	ありなし	禁止(2)、依頼(2) 禁止(2)、依頼(2)
III	8	ありなし	伝聞(2)、願望(2) 伝聞(2)、願望(2)
IV	24	ありなし	1人称(4)、2人称(4)、3人称(4) 1人称(4)、2人称(4)、3人称(4)

以下は主語が一人称となる場合のタスク 1 とタスク 2 の実験文例である。

タスク 1 の例

山田	あ、田中さん。明日は休みですね。川口さんと海に行きましょう。
田中	そうですねえ・・・でも、明日は映画を観に行こうと思います。
山田	そうですか。まあ、映画もおもしろいでしょうね。
質問	映画を観に行くのはだれですか？
回答	わたし (田中) あなた (山田) かれ・かのじよ (川口)

タスク 2 の例

山田	田中さん。川口さんが田中さんのことを心配していましたよ。
田中	そうですか。実は今から (a) 病院へ行こうと思います。 -2 -1 0 +1 +2 (b) わたしは・が病院へ行こうと思います。 -2 -1 0 +1 +2
山田	そうですね。それがいいでしょうね。

また、これらの実験に先立ち、研究全体の説明と実験実施に関わる倫理的説明を行った上で、同意書への署名、学習歴や現在の学習状況等を問うアンケートも実施した。さらに日本語検定試験 N2 または N1 に合格していない協力者には日本語力を測るテストを行い、上級以上のレベルであることを確認した。

実験調査は、国内の 6 大学と韓国、英国の 5 大学で行い、大学で日本語を専攻する 96 名の参加者のうち、語学力や母語などの設定した条件に合致しなかった 6 名を除く 90 名 (中国語母語、韓国語母語、英語母語の学習者それぞれ 30 名) を研究対象とした。また、統制群としての日本語母語話者については、国内の 2 大学で同様の実験を行い、日本語学習者グループと同数の大学学部生 30 名分の実験結果を対象とすることとした。その他の情報については、表 3 を参照されたい。

表 3：実験調査協力者

母語	人数	平均年齢	日本語力内訳	平均日本滞在期間(月)
韓国語	30	21.7	N1=19 N2=11	13.1
中国語	30	22.1	N1=17 N2=13	8.8
英語	30	23.0	N1=9 N2=21	12.8
日本語	30	19.2	-----	-----

4. 研究成果

以下の表は、タスク 1 の実験結果を人称と母語別に集計したものである。なお、文タイプの各コラムの左側は正答率の平均 (%)、右側は全 90 問または 180 問中の正答数である。

表 4.1：タスク 1 (1 人称主語) 結果

母語	1 人称 (制限あり)		1 人称 (なし)	
	意向	内的心理		
韓国語 (N=30)	98.9 (89/90)	100 (90/90)	91.7 (165/180)	
中国語 (N=30)	100 (90/90)	96.7 (87/90)	76.1 (137/180)	
英語 (N=30)	96.7 (87/90)	93.3 (84/90)	81.7 (147/180)	
日本語 (N=30)	97.8 (88/90)	100 (90/90)	96.1 (173/180)	

表 4.2：タスク 1 (2 人称主語) 結果

母語	2 人称 (制限あり)		2 人称 (なし)	
	依頼	禁止		
韓国語 (N=30)	100 (90/90)	92.2 (83/90)	99.4 (179/180)	
中国語 (N=30)	92.2 (83/90)	77.8 (70/90)	97.8 (176/180)	
英語 (N=30)	95.6 (86/90)	87.8 (79/90)	98.3 (177/180)	
日本語 (N=30)	96.7 (87/90)	96.7 (87/90)	99.4 (179/180)	

表 4.3：タスク 1 (3 人称主語) 結果

母語	3 人称 (制限あり)		3 人称 (なし)	
	伝聞	願望		
韓国語 (N=30)	98.9 (89/90)	100 (90/90)	96.1 (173/180)	
中国語 (N=30)	100 (90/90)	95.6 (86/90)	92.8 (167/180)	
英語 (N=30)	98.9 (89/90)	96.7 (87/90)	95.0 (171/180)	
日本語 (N=30)	98.9 (89/90)	98.9 (89/90)	96.7 (174/180)	

タスク 2 は、どの例文も主語を省略するかしないかのどちらかの回答が期待されているため、タスク 2 の例で示された (a) がマイナスである場合は (b) はプラスに、(a) がプラスの場合は (b) はマイナスになる。従って、協力者の回答を分析する際、期待された回答で (a) と (b) が反対の値になっている場合のみ 1 の値を付与し、どちらかが期待された回答であっても (a) と (b) が反対の値になっていない場合は回答に一貫性がないと考えて 0 として集計した。以下は、それぞれの母語グループの平均値をまとめたものであるが、1 の値に近いものが、より期待された判断を行っているということを意味する。

表 5.1: タスク 2 韓国語母語話者の結果

	1人称 (制限あり)	1人称 (なし)	2人称 (制限あり)	2人称 (なし)	3人称 (制限あり)	3人称 (なし)
主語省略文	0.36	0.53	0.50	0.48	0.53	0.33
主語省略不可文	0.73	0.84	0.73	0.79	0.85	0.83

表 5.2: タスク 2 中国語母語話者の結果

	1人称 (制限あり)	1人称 (なし)	2人称 (制限あり)	2人称 (なし)	3人称 (制限あり)	3人称 (なし)
主語省略文	0.51	0.76	0.66	0.61	0.73	0.74
主語省略不可文	0.54	0.83	0.63	0.78	0.71	0.85

表 5.3: タスク 2 英語母語話者の結果

	1人称 (制限あり)	1人称 (なし)	2人称 (制限あり)	2人称 (なし)	3人称 (制限あり)	3人称 (なし)
主語省略文	0.53	0.63	0.77	0.49	0.76	0.58
主語省略不可文	0.56	0.88	0.56	0.66	0.68	0.87

表 5.4: タスク 2 日本語母語話者の結果

	1人称 (制限あり)	1人称 (なし)	2人称 (制限あり)	2人称 (なし)	3人称 (制限あり)	3人称 (なし)
主語省略文	0.63	0.62	0.68	0.56	0.68	0.44
主語省略不可文	0.61	0.80	0.79	0.71	0.84	0.87

さらに、これらの結果に統計処理を施し、学習者グループが統制群である日本語母語話者とどのような差異が見られるのかを調べた。

まず、タスク 1 については、1 人称制限あり (内的心理述語文) に関して、英語母語話者グループと統制群の結果に有意差が観察された ( $F(3, 116)=4.25, p<.01, p<.05$ )。また、1 人称制限なしの文に関しては、中国語母語話者グループ ( $p=.000$ ) と英語母語話者グループ ( $p=.001$ ) の結果が統制群の結果と有意差があった ( $F(3, 116)12.02, p=.000$ )。さらに、2 人称制限あり (禁止文) に関して、中国語母語話者と統制群の結果に有意差が見られた ( $F(3, 116)=6.07, p=.001, p=.000$ )。

タスク 2 については、1 人称制限あり (意向; 主語省略) 文に関して、韓国語母語グループと統制群の結果に有意差があり ( $F(3, 116)=3.49, p<.05, p<.05$ )、2 人称制限あり (禁止; 主語非省略) の文において、中国語母語グループと英語母語グループの結果が統制群の結果と有意差があった ( $F(3, 116)=5.58, p=.001, p=.01$ )。さらに、3 人称制限なし (主語省略) 文においても、中国語母語話者と統制群の結果に有意差が観察された ( $F(3, 116)=6.82, p=.000, p<.05$ )。

以上のことから、タスク 1 での調査項目である省略主語が指し示すものが誰であるかについては、韓国語母語話者は統制群と差異はなかったが、英語と中国語母語話者は、いくつかの項目に関して、統制群と差異があることが明らかとなった。また、タスク 2 での主語を省略するか否かの判断については、ある項目について英語・中国語母語話者がともに統制群と差異があることがわかった。

これまで、中国語と韓国語、日本語は radical *pro-drop* の言語として論じられてきたが、本研究の実験結果では、むしろ中国語母語話者グループは英語母語話者グループの振る舞いと類似しており、このことはこれまでの *pro-drop* パラメータや主語省略に関する類型論では説明することはできない。しかし、近年の研究 (例えば長谷川 2009 など) で、日本語の人称制限には「一致」が関わっていること、さらに、中国語は一致に関しては、日本語ではなく英語と同じ範疇に属するという提案がなされている (Miyagawa 2017; Typology under Strong Uniformity)。この観点から言えば、本研究の実験結果はこれらの理論を支持する証拠を提出しており、第二言語習得における主語省略現象研究の新たな切り口を見出す役割を果たしたと考えられる。一致の類型論で説明できない事実については、今後マイクロパラメータ (cf. Baker 2008) などの立場からも検証していきたい。

#### <引用文献>

- ①Baker, M. (2008). The macroparameter in a microparametric world. In T. Biberauer (ed.), *The Limits of Syntactic Variation*. (pp. 351-373). John Benjamins.
- ②Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- ③Hasegawa, N. (2009). Agreement at the CP level: Clause types and the ‘person’ restriction on the subject. In *MIT Working Papers in Linguistics: The Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics 5* (pp. 131-152). MIT.
- ④Kizu, M. (2013). L2 acquisition of null subjects in Japanese: a new generative perspective and its pedagogical implications. In M. Whong, K. Gill and H. Marsden (eds.), *Universal Grammar and the Second Language Classroom*. (pp.35-55). Springer.
- ⑤Kizu, M. and K. Yamada (2013a). Null subject and topic drop in L2 Japanese: some implications to the Interface Hypothesis. In Y. Otsu (ed.), *The Proceedings of the 14<sup>th</sup> TCP*. (pp.115-135). Tokyo: Hitsuji Shobo.
- ⑥Kizu, M. and K. Yamada (2013b). L2 Japanese null subjects at the interface of syntax and discourse. Presented at *the J-SLA: the 13<sup>th</sup> Annual Conference*, Chuo University.
- ⑦Miyagawa, S. (2017). *Agreement Beyond Phi*. MIT Press.
- ⑧Okuma, T. (2012). L2 acquisition on discourse constraints on the use of Japanese pronouns. In A. Biller, E. Chung and A. Kimball (eds.), *BUCLD 36 Online Proceedings Supplement* (pp.1-15). Boston University.
- ⑨Platzack, C. (2001). The vulnerable C-domain. *Brain and Language* 77: 364-377.
- ⑩Rothman, J. (2009). Pragmatic deficits with syntactic consequences: L2 pronominal subjects

and the syntax-pragmatics interface. *Journal of Pragmatics* 41: 951-973.

① Sorace, A. and F. Filiaci (2006). Anaphora resolution in near-native speakers of Italian. *Second Language Research* 22.3: 339-368.

② Yamada, K. (2009). Acquisition of zero pronouns in discourse by Korean and English learners of L2 Japanese. In M. Bowles, et al. (eds.), *Proceedings of the 10<sup>th</sup> Generative approaches to Second Language Acquisition Conference*. (pp. 60-68). Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 (計 1 件)

① Kizu, M. and K. Yamada (2017). The effect of instruction on null subject: a case of L2 Japanese learners. In M. Hirakawa et al. (eds.), *Proceedings of PacSLRF 2016*. (pp. 115-120). Japan Second Language Association. (発表時の査読のみ)

〔学会発表〕 (計 3 件)

① Kizu, M. and K. Yamada (2016). The effect of instruction on null subject: a case of L2 Japanese learners. *Pacific Second Language Research Forum 2016*, Chuo University.

② Kizu, M. (2016). What is the role of linguistic theory in second language teaching?: the case of subject omission in Japanese. Teaching and Learning Japanese at SOAS - past, present, future: Celebrating 100 years of Japanese language pedagogy. SOAS, University of London.

③ Kizu, M. and K. Yamada (2017 予定). L2 acquisition of 'agreement' in speech act projections. *British Association for Applied Linguistics (BAAL 2017)*. University of Leeds.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木津 弥佳 (KIZU, Mika)

ノートルダム清心女子大学・文学部英語英文学科・教授

研究者番号：00759037

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

山田 一美 (YAMADA, Kazumi)